

永遠の 一駅手前

現代ロシア文学案内

沼野充義



永遠の 一駅手前

現代ロシア文学案内

沼野充義

作品社



沼野充義（ぬまの・みつよし）
一九五四年、東京生まれ。東京大学教養学部助教授。東京大学卒業、八一〜八五年までフルブライトの留学生としてハーバード大学に学ぶ。八七〜八八年には、ワルシャワ大学で日本語・日本文学の講義を行う。著書に『屋根の上のバイリンガル』『もつと知りたいソ連』（共著）『パロッドの愉しみ』（共著）、訳書にレム『金星応答なし』『枯草熱』（共訳）、カヴェーリン『師匠たちと弟子たち』、グリーン『輝く世界』など。

永遠の一駅手前

——現代ロシア文学案内

一九八九年六月二五日 第一刷印刷

一九八九年六月三〇日 第一刷発行

著者 沼野充義

発行者 和田肇

発行所 株式会社 作品社

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四

〒103 電話（03）26219753

FAX （03）26219753

振替口座（東京）六一二七一八三

本文印刷 シナノ印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

永遠の一駅手前

目次

はじめに 9

――同時代 1980—1986

ロシアの過去と現在 16

老人たちのひととき 23

社会主義リアリズムを超えて 32

アメリカのポーランド人 41

過激な無垢 49

さまよえるロシア文学 56

ソルジェニーツィンか、シニャフスキーか 60

性から聖へ 64

酒についてではない話 72

永遠の一駅手前で途中下車 76

ロシアのユダヤ人 83

チャヤーノフの一九八四年 90

ロシア文学そのもの 94

オクジャワの『ボナパルトとの出会い』 101

歴史の過剰、

あるいは現代ポーランド詩の栄光と悲慘 105

ロマーン・ヤコプソンの遺産 114

亡命ロシア文学「第三の波」・総括 118

アブラム・テルツの『おやすみなさい』 125

ある天才詩人の肖像 132

とても若いソ連の新人たち 141

Ⅱ 停滯からペロストロイカへ 1985—1988

職業としての作家 146

多彩さの中の貧困 155

メッセージの呪縛 163

今、ソビエト文学に何が起こっているのか 171

ソビエト文学の現況と翻訳・研究 '86 174

ゴルバチョフ政権と文学界の“グラスノスチ” 179

ソビエト文学の70年 204

スターリン批判の新たな波 211

スターリン時代の子供たち 234

レニングラードの熱狂 243

ワルシャワのポーランド語教室から 245

ウィーンのユダヤ人 251

Ⅲ 二つの「O」^オ
失われた輪を求めて

傷だらけの魅惑 256

オペリウ 272

震える喉・熱い息 289

オクジャワの愛の形 301

あとがき

初出一覧 323

文献目録 326

人名索引

『カパー絵』

マルティロス・サリヤン『詩人』（一九〇七―八頃）
サリヤン（一八八〇―一九七二）は、アルメニア系
の画家。表紙は、ロシアの象徴主義芸術運動の中心
であった『金羊毛』誌一九〇八年第十号に、「詩人」
というタイトルの下に掲載された複製画による。

永遠の一駅手前

現代ロシア文学案内

永遠の一駅手前で途中下車

なぜかひさしぶりに

とてもものんびりしてしまつたばかり

ここは地図の余白です 誰もここを

訪れようとはしない

（バグノポリスキー）

はじめに——雪どけからベレストロイカまで

ソビエト文学（現代ロシア文学）はスターリンの死後から一九六〇年代にかけて、ソルジェニーツイン、エフトウシェンコ、アクシヨノフといった新しい才能を次々と送り出し、高揚期を迎える。この時期の作品は国際的に話題になったものも多く、日本でも翻訳で広く読まれた。一方、それに続く七〇年代は、少々つかみどころのない「停滞期」で、少なくとも六〇年代のような花形を生み出すことはなかった。したがって、この時期以降のソビエト文学は、翻訳・紹介されることも次第に稀になり、日本の一般読者にはほとんど知られていないのが現状である。しかし、時の政治情勢の影響で一進一退を繰り返しながらも、ソビエト文学は徐々に変化し続け、スターリン時代に支配的であった教条的な文学観を乗り越えようとしてきた。いわゆる「社会主義リアリズム」は長い間建前の上では公認の文学観の座を譲り渡そうとしなかったのだが、実質的には現実の変化にある程度対応できる柔軟なものになっていったのである。つまり「社会主義リアリズム」は作家たちの実践の中でなしくずしにされつつある、と言ってもよい。

七〇年代のソ連文壇で特に大きな影響力を持った作家の一人は、「都会派」の代表格として知られるトリイフォノフ（八一年没）である。彼の小説は、主に戦後のモスクワの知識階級の生活を題材にと

って、ソビエト史の過去と現在の意味を鋭く問い直したものだ。より若い世代の作家で、同じく都会生活に題材をとった小説の書き手として特に注目し値するのは——残念ながら、これまでのところ日本語にはまったく翻訳されていないが——アンドレイ・ビートフだろう。繊細な心理描写を得意とする彼は、また見事な文体の持ち主でもある。その代表作『プーシキン館』は様々な手法の実験を試みた野心作であり、ナボコフの伝統を受け継ぐ者がソ連にもいることをはっきりと示している。

また、六〇年代後半から顕著になってきたのは、それまでのソ連文学のイメージから大きくはみだすような異色作家の活動である。ギターを抱えた「吟遊詩人」オクジャワが歴史小説の分野に転じて、「ちっぽけな人間」に焦点をあわせた独特の味わいのある作品を次々と発表し、アイトマートフやイスカデルといった少数民族出身の非ロシア人作家がロシア語文壇の中心に進出するなど、現代ソ連文学は着実に多様化して行った。他方、SFのストルガツキー兄弟や、探偵小説のセミョーフやワイネル兄弟、歴史大衆小説のピークリなど、「純文学」以外の分野で様々な才能が競い合うようになってきた点も、見逃せない。

七〇年代以降のソ連で注目すべきもう一つの現象は、一般に「農村派」と呼ばれる文学の隆盛だろう。ロシアでは農村を舞台にした小説には古い伝統があるが、現代の農村派の特徴は、科学文明によって古き良きロシアの伝統が破壊されつつあるという危機感を共有している点と言えるだろうか。この傾向を代表する作家としては、アブラーモフ、アスターフィエフ、ペロフ、ラスプーチンなどの名前を挙げることができる。

「農村派」はイデオロギーから言って保守派であり、このような作家たちが文壇で大きな勢力になってきたという現象は、最近ソ連で強まりつつあるロシア的な民族主義の傾向と呼応するものでもある。この傾向が現在ソ連の抱える多くの社会問題に対する反動として出てきたことは理解できるが、

これはまた、独善的なショールヴィニズムや異民族差別につながる可能性をはらんでいるだけに、多民族国家ソ連にとってかなり危険な道であることも確かだろう。

ここまではソ連国内の状況だが、実は七〇年代以降、多くのすぐれた作家が創作の自由を求めて西側に亡命しているのが、欧米における亡命者の著作も視野に入れないと現代ロシア文学の全体像は描けない。ソルジェニーツィン、アクショノフ、シニャフスキー、プロツキーといった現代ロシア文学の最良の部分を代表する作家たちがすべて、現在ソ連の外ににいるというのは、なんとも皮肉である。その結果、もともとは同じ一つの現代ロシア文学であるはずのものが、ソ連国内の文学と亡命文学の二つに別れて並行的に存在するという異常な事態になってしまった。

一九八五年政権についたゴルバチョフは、改革路線を推し進め、その影響は文学にもはつきりと認められるようになっていく。それまで政治的な理由のため禁止されていた作品が次々に解禁され、不当に無視されていた過去の文学遺産が再評価され、タブーとされてきた亡命文学までもが出版されるようになった。「二つのロシア文学」がまた一つに合流する可能性についてさえ、語られるようになったのである。もっとも、まだすべての問題が解決したわけではない。いまだに文学は数々の制約に縛られたままであり、むしろペレストロイカの功罪が問われるのはこれから先のことだろう。現代ロシア文学は、再びぼくたちを楽しませてくれるようになるだろうか。それについては、ペレストロイカの今後の成果に待たねばならない。

もっとも、誤解のないように付け加えておきたいのは、政治改革の今後の進展がソ連文学の活性化の鍵を握ることは確かだろうが、それは文学が政治によって簡単に作り変えられるものだという意味ではない。確かに歴史がこれまで示してきたのは、政治に屈従させられる文学という構図でしかなく、権力を敵に回した時、文学はあまりに非力なものだったかも知れない。しかし、それは言わばか

りその現実が残念ながらそういう形を取っていたというだけのこと、理念において本物の文学はいつも政治のはるか上に立っていたのだ。だから、乱暴な言い方をあえてすれば、文学にとって究極的には政治など輕蔑すべきものであり、ペレストロイカが成功しようと、無残な失敗に終わろうと文学は存在し続けるのである。文学はどんな悪い時代にも、常にどこかに——地下であらうと、国家の境界の向う側であらうと——存在してきたのだし、これからも存在し続けるだろう。ペレストロイカから文学にとって有意義な教訓が引き出せるとすれば、それはまさにこういうことであつて、「政治がよくなれば文学もよくなる」などという短絡的な論理ではない。そして、本書は現代ロシア文学という無限に広い遊園地をあてもなく駆け回っているうちに偶然できてしまった探検記のようなものに過ぎないが、その全体を貫き、統一するものが何かあるとすれば、それは本物の文学がいつもどこかに存在するものだ、という愚直な信念である。その信念が正しかったかどうかについては、この本に登場する作家たちが雄弁に語ってくれるだろう。

本書は、主に現代ロシア文学（つまり、ロシア語で書かれた現代文学）に関して筆者が折りに触れて発表してきたエッセイや論文をまとめたものである。いま「現代ロシア文学」と言つて、「ソビエト文学」と言わなかったのは、ソ連という国家の人為的な境界によって文学を限定したくないからである。実際、正統的な文学史では無視されることの多い亡命文学に重点が置かれていることは、本書の特徴の一つと言つてもいいだろう。

第一部には、主として一九七〇年代から八〇年代にかけての——日本ではほとんど紹介されていない——とびきり生きのいい文学をめぐつて書いたものを集め、第二部には、ペレストロイカの中での現代ロシア文学の状況を論じたものを収録した。第三部は、ロシア文学の現在を考えると忘れられ

とできない（しかし、普通の文学史からは抜け落ちてしまいがちな）詩人たちを扱っている。

なお第一部には、現代ポーランド文学を対象としたエッセイも二本ほど紛れこんでいるが、他の部分と比べてそれほど違和感はないだろうと思う。ポーランドはロシアの隣国でありながら、文学的にはまったく別個の伝統を誇っており、これら二国の文学を同列に論ずることができないのはもちろんである。しかし、好むと好まざるとにかかわらず、この二つが同じ時代を共有しているということは事実だろう。いや、実は同時代の文学ということであれば、日本文学であろうと、アメリカ合衆国文学であろうと、読み方にたいした違いはないはずだ。ぼくが本当に読みたかったのは、一切の限定抜きの文学であって、それがたまたまロシア語やポーランド語で書かれていた、というだけの話なのかも知れない。

